

若者たちが繋がる

「住み開き」

～広がるシェアハウス～



「無縁社会」や「孤族」という言葉がひろがり、社会的な問題となっています。

その要因として長引く不況、薄れる家族の絆などが取り上げられています。その一方で人と繋がることを求め、若い人が集まる家が増えています。京都でもそんな空間作りをしている若者たちを追ってみました。

(京都若者サポートステーション ユースワーカー 富田祐子)

株式会社 めい

昨年の1月に出会った若い2人が意気投合し、4月に株式会社設立、職住一体型シェアハウス「めいちゃんち」の運営を始めました。学生同士だった扇澤友樹さん(23)と日下部淑世さん(25)は内定していた就職先を断り起業しました。現在、伏見区に準備中のカフェ付きを含め、4軒のシェアハウスを京都市内で運営しています。

1軒目(北区)は寺子屋がコンセプトのシェアハウスを開設。ツイッターやフェイスブックで繋がった18〜30歳前後の若者について「求めているのは出会いと未来。変わった価値観の人がたくさん来るので、いい刺激があります」と話しています。

この住人になると、一人暮らしの時に支払う敷金礼金分の初期費用だけで、3年間会社の持つ他のシェアハウスもシェアできる仕組みになっています。これには好きな場所を見つけてほしい、働く力を身につけてほしい、常に仲間とつながってほしいという気持ちがかめられています。



京都 ゲストハウス 楽縁

運営代表の田中崇文さん



二条城から徒歩5分ほどに町家を改装したゲストハウス・楽縁があります。運営代表の田中崇文さん(23)の高校時代は政治家志望でしたが、高卒後、日本中を旅し始めました。「ヒッチハイクでさまざまな人と出会って、助けられたりもしたし価値観や考え方が変わりました」と話しています。その後、サラリーマンを経て、旅人の思い出になればいいなと昨年7月にゲストハウスをオープンしました。

ゲストハウスには田中さんと出会った人や「コミデ繋がった人をメインに20〜30代の人が集まっています。特徴は泊まらずにふらっと遊びに来る人が多いこと。宿泊者でも「ここに行けば何か楽しいことがあるかも」と期待しており、交流スペースのリビングで過ごす人がほとんど。

田中さんは「人との出会いで価値観って変わると思うんです。楽縁に行くと人生変わった! っていつてもうえたら本望ですね」と語っています。

仲間募集中! 応援してくださる方 募集中!

株主さんはもちろん、家を貸してくださる方、タイアップしてくださる地域や企業や学校、人と繋げてくださる方など、協力者を募集しています!!

株式会社めい 検索

日下部淑世さん(左)と扇澤友樹さん



アサタ ワタルさんに 聞きました



アサタワタル
1979年大阪生まれ。日常再編集をテーマにミュージシャン、作家、大学講師として、幅広く活動するクリエイター。

プライベートな空間を人と繋がる場として開放する若者の増加について、その活動を「住み開き」と提唱し、同名の著書が話題のアサタワタル氏にお話を伺いました。

「住み開き」の活動事例で「職住一体型」というキーワードが必ずあります。僕はプライベートから仕事にも繋がるスキルが当然あると思っています。終身雇用の崩壊や雇用形態の多様化など、仕事に対する価値観が変わってきたこと。それがなければ、このような活動は生まれていないかもしれない。

田中さんは「人との出会いで価値観って変わると思うんです。楽縁に行くと人生変わった! っていつてもうえたら本望ですね」と語っています。 「住み開き」という言葉から「こいつう考え方があるんだ」と勇気や安心感を受けとった人もいます。血縁や地縁だけでなく、より異なる価値観の同士が一緒にいられる状況になれば、より豊かな世の中になると思います。また、個人でやりたいことと社会で求められていること。この2つがいざいざどこかで繋がってくることに対して、希望を持続してほしい。「住み開き」という言葉に縛られる必要はないです。やることだけが目的になってほしくないし、やって失敗して気付くということも大事だと思います。

